

【資 料】

イギリスにおけるソビエト会計研究事情

森 章

は じ め に

今日、日本の会計学界における多くの論者の研究主題は、日本をはじめとしてアメリカ、西ドイツ、イギリス、そしてフランス等の主要な資本主義諸国における会計の諸問題にむけられている。そして、社会主義諸国における会計に眼をむけて、それを研究主題にしている論者の数はきわめて少ない。こうした研究傾向は、日本のみならず主要な先進資本主義諸国の会計学界にもみられる共通の現象であろう。

しかし、先進資本主義諸国の会計学界では、近年、自国の社会体制と異なる社会主義諸国の会計の諸問題を考察しようとする研究者が、いまだその数は少ないとはいえ、次第にあらわれはじめている。イギリスのバーミンガム大学においてソビエト会計を研究している D. T. Bailey 氏はその代表者の一人であろう。

このたび、1978年から79年にかけて、わたくしはバーミンガム大学に留学する機会をえたので、イギリスにおけるソビエト会計研究事情について若干の紹介をしておきたい。

(1)

バーミンガム大学のソビエト会計研究を考察する前に、まず、社会主義会計研究を生みだすにいたった土壌ともいえるべき当大学の会計学についてふれておかねばならない。

バーミンガム大学 (University of Birmingham) は、イングランド中部の人口

約110万をかかえた大産業都市であるバーミンガムにある。当大学は、1900年に創立し⁽¹⁾、学生数7,633人、教員数1,002人(うち教授数164人)で、社会、人文、自然の各学部からなる総合大学である⁽²⁾。

バーミンガム大学の会計学研究は、商業および社会科学学部 (Faculty of Commerce and Social Science) の中の会計学部門ですすめられている。会計学部門の長は T. E. Gambling 教授であり、そのもとに8人のスタッフがいて、簿記、財務会計、管理会計等の講義を担当している。いま、会計学研究室のある Muirhead Tower において、これらスタッフが、講義とは別の目下研究をおこなっている主題をしめせば、次のようになる(表参照)。

会計学部門のスタッフ	研 究 主 題
Prof. T.E. Gambling	General accounting theory; Accounting research methodology
Prof. J.M. Samuels	Financial management
Mr. A.G. Piper	Transfer pricing and international accounting
Mr. C.P. Rickwood	Economic aspects of management accounting theory and theory of finance
Mr. D.T. Bailey	Soviet accounting
Mr. R. G. Wallace	Financial accounting
Mr. A.P. Thomas	Behavioural aspects of accounting
Mr. R.H. Jones	Public sector accounting
Mr. N.A. Hassan	Distinctive accounting problems of multinational companies; Accounting and human information processing

この表からわかるように⁽³⁾、スタッフは会計学界で今日関心の的になっている主題を究明していることを知ることができよう。しかも、スタッフのこれらの研究成果を総合して、とりわけ、資本主義諸国の会計はもちろんのこと社会主義のもとでの会計をも比較研究しながら、会計方法論を展開し、会計理論を考察しているのが T. E. Gambling 教授である。このため、教授はソビエト会計にとりわけ強い関心をしめしており、イギリスでは比較的早い時期の1965年

にソビエトを視察し、帰国後ソビエト会計の現状についての論稿を発表している⁽⁴⁾。また、教授の労作「社会的会計学」では、これまでの会計理論家は、客観的とされている会計技法を多様な社会の国民所得会計システムに適用しようとしてきたが、GNP等の測定と対比させて、国民の福祉(welfare)を測定し比較する試みはなされていないとし、この測定技法を個々の企業レベルと全体の社会レベルでいかに適用するかを、ミクロ会計(Micro-Accounting)とマクロ会計(Macro-Accounting)とにわけつつ、あわせてソビエト会計制度にも随所にふれながら追求し、その会計の形式と組織とを考察している⁽⁵⁾。もっとも、教授は科学的社会主義とはかならずしもいえない立場をとっているけれども⁽⁶⁾、会計のあり方を国民の福祉の測定におきながら、資本主義会計のみに限定せず、好むと好まないとに関係なく現存する社会主義会計をも研究領域にとりいれて、広い視点から比較検討しようとする学究姿勢には感心させられよう。こうした研究をしている T.E. Gambling 教授のもとで、D.T. Bailey 氏はソビエト会計を系統的に究明しているのである。

バーミンガム大学においてソビエト会計を研究するのに有利な研究環境はもう一つある。それは当大学にあるロシアおよび東欧研究センター(Russian and East European Studies Center)とアレクサンダー・バイコフ図書館(Alexander Baykov Library)の存在であろう。

まず、前者のセンターの設立過程をみよう⁽⁷⁾。バーミンガム大学では、ロシア革命の年である1917年からすでにロシア語教育が開始され、このロシア語教員たちによって1921年に人文学部(Faculty of Arts)が設立された。当学部ではロシア語と同時に、戦時中にはポーランド語教育もおこなわれた。こうした語学教育の発達を背景にしながら、1920年にソビエトをさり、チェコスロヴァキアをへて、1939年にはイギリスへわたってきてバーミンガム大学で講義をしていた Alexander Baykov 教授⁽⁸⁾を中心にしたソ連邦経済研究部門(Department of Economic Institutions of the USSR)が、1947年に商業および社会科学学部の中に設置された。そして、1963年に教授が亡くなったあと、当部門は学部から独立して現在のロシアおよび東欧研究センターに発展的に改組されたの

である。今日、当センターでは、所長の R.W. Davies 教授⁽¹⁾以下 25 人の研究員が、大学の各学部と密接な連携をたもちながら、ソビエト研究とポーランドを中心にした東欧研究をしており、業績をあげている⁽²⁾。

アレクサンダー・バイコフ図書館は、ロシアおよび東欧研究センターのある Ashley Building と呼ばれている建物の中にあり、図書館の設立とセンターの発展に貢献した故 Alexander Baykov 教授の名前を館名にした図書館である。教授の蔵書とともに、当図書館には 1976 年 5 月現在で、書籍 20,000 部、パンフレット 10,000 部、定期刊行物 6,000 部、マイクロフィルム 850 箱のソ連と東欧諸国の文献資料があり、さらに、約 3,000 部の書籍とパンフレットが毎年補充されつつある⁽³⁾。会計学についての文献資料もそれに含まれていることはいうまでもない。D.T. Bailey 氏は、こうしたセンターの研究員との討議を通して、また、バイコフ図書館の文献資料を活用しながら、ソビエト会計を組織的に究明しているのである。

(1) ただし、前身は Mason Science College として 1880 年に出発し、1898 年には Mason University College と合体して今日にいたっている (Commonwealth Universities Yearbook. 1975, p.252.)。

(2) The World of Learning 1975-76. p.1358.

(3) この表は筆者のもとに於て C.P. Rickwood 氏が書いてくれたものである。

(4) T.E. Gambling, Accounting and Management in the Soviet Union. ACCOUNTANT, 18 December 1965, pp.801-805.

(5) T.E. Gambling, Societal Accounting. 1974. 書名が、Social Accounting でなく、Societal Accounting であることに注目されたい。なお、教授には、本書のほかに、次の三つの著書がある。A One-Year Accounting Course (Parts 1 and 2). Modern Accounting. 1975. Beyond the Conventions of Accounting. 1978.

(6) たとえば、教授はプロレタリア革命が資本主義経済の矛盾という病気をただちに克服するとは考えない立場をとっている (T.E. Gambling, Marx, Medicine and Accounting. INFORMAL DISCUSSION PAPER, DEPARTMENT OF ACCOUNTING, UNIVERSITY OF BIRMINGHAM, March 1978; p.1.)。こうした立場にたたざるをえないのは、今日のイギリスにおける社会経済的条件のもとでは無理からぬことであろう。

(7) The Russian and East-European Holdings of the University of Birmingham. A Reader's Guide. 1976, p.1.

(8) この間に、教授は、The Development of the Soviet Economic System. 1946 と、Soviet

Foreign Trade. 1946 の二大労作を完成させた。すでに邦訳もある前者の著書は、豊富な資料を駆使し膨大な事実を克明に記述した実証主義と、明確な評価を下すことを回避した執拗なまでの中立主義の観点からのソビエト経済史として、日本でもよく知られている（野々村一雄，岡稔共訳，ソヴェート同盟の経済制度，1954，訳序参照）。

(9) 教授には E.H. Carr との次の共著がある。Foundations of a Planned Economy, 1926-1929 (1). Penguin Books, 1974.

(10) センターの経済分野における近年の研究成果としては、R. Amann, M.J. Berry, R.W. Davies, Science and Industry in the U.S.S.R. University of Birmingham. がある。また、1978 年秋には、ソ連邦科学アカデミー会員 N.P. Fedorenko 氏 (Head of the Central Economics-Mathematical Institute of the USSR Academy of Science) が当センターを訪問し、10月19日には、「国民経済の計画化と管理の改善の諸問題」のセミナーが開催されており、ソビエトとの学術交流もなされている。

(11) The Russian and East-European Holdings of the University of Birmingham. A Reader's Guide. 1976, p.25.

(2)

ところで、多数の人々がバーミンガム大学におけるソビエト会計研究を関知することになった一つの大きな契機は、当大学からの「ソビエト会計通報」(Soviet Accounting Bulletin 略して SAB) 誌の発行であろう。そこで、なによりもまず、この雑誌を若干紹介しておきたい。

当雑誌は 1973 年春に創刊号を発刊し、各号ほぼ 40 頁からなる季刊誌である。まず、創刊号の巻頭論文でしめされている SAB の発刊理由をみてみると次のようである。

《過去 55 年間に、ソ連邦は世界で第 2 位の工業国の地位にまで成長した。このことは周知の事実であるが、しかし、この国で採用されている会計実践についてはほとんど知られていないし、また、資本主義世界の工業国で利用されている会計実践と類似しているのかそれとも異なるのか、企業管理にとってのその意義はどうか、経済の効率的機能のためのその貢献はどうか、についてもほとんど知られていない。計画経済の導入、企業家の追放が会計実践にどのような影響をあたえたのか。こうした質問やこれに類似した質問には明確に答えられない。解答のための研究がないのである。》

ソビエト会計についての英語による研究はアメリカでの2人の学者の労作にわずかにみられる。イギリスにはない。R. W. Campbellの「ソビエトの計画化と管理における会計」(Accounting in Soviet Planning and Management)が1963年に公刊され、最近では、B. Herowitzの「会計管理と1966年のソビエトの経済改革」(Accounting Controls and the Soviet Economic Reforms of 1966)が1970年に公刊された。もちろん、これらソビエト工業管理の学者たちは、ソビエト会計と企業における会計主任の役割を付随的に言及している。しかも、Campbellがいうように、「米国のような国の会計に有効に適用されうるごとき概念及び技術を、ソ連の会計が発達せしめたかどうかの判定は実際の会計士の手にゆだねられなくてはならない」(pp.6-7, 邦訳14頁)。「ソビエト会計通報」誌を通して、読者がソビエト会計の本質について多少なりとも推論をえられれば幸いである。

「ソビエト会計通報」誌は、ソビエト工業を究明しているバーミンガム大学のロシアおよび東欧研究センターと異なった社会環境での会計実践を究明している会計部門にとってのお互いの利益のために生れた。初期の発行はソ連邦における会計の内容を宣伝する意味をもっている。

計画経済の発展における会計の役割、非市場経済における会計の意義については、学者たちが関心をもつ問題である。ソビエト企業との増大しつつある経営取引の機会に直面しているビジネスマンにとっては、ソビエト会計実践を少しでも知っていることは取引をすすめるにあたって有意義である。しかし、イギリスの文献には、ソビエト会計についての探究はほとんどなく、事実、その情報はまったくない。みたところ、過去20年間に出版された多種類の会計論文でも研究がなされていない。主要工業国の会計実践にとってのこのような無関心は職業団体にも等しくみられる。「ソビエト会計通報」誌はこうした無視を取り除く一助となるように発刊される⁽¹⁾。

以上の理由から発行されているSABであるが、次に当雑誌の内容をみてみよう。

表紙を開くと、「社会主義は会計である⁽²⁾」というレーニンの有名な言葉がま

ず眼にとびこんでくる。そして、SAB はバーミンガム大学のロシアおよび東欧研究センターとの協力のもとで、会計学部門から発刊された雑誌であり、その編集責任者は D.T.Bailey 氏であることが明記している。そのあと、バーミンガム大学の会計学は、西欧諸国の会計はもちろんのこと、社会経済体制の異なる社会で採用されている会計理論をも研究している、という T.E. Gambling 教授の言葉と、ロシアおよび東欧研究センターは、ロシア研究の長い伝統を基礎にして、今日では社会学、歴史学、言語学、文学、そして技術学の各部門にまたがる学際的研究をすすめている、という R.W. Davies 教授の言葉とが、記載されている。

毎号の SAB は次のような四つの編集方針を採用している。(1) ソビエト会計についての適時な論稿、(2) ソビエトで発行されている会計専門誌「簿記計算」(Бухгалтерский учет) に発表された論文のうちから選定された若干の論文の紹介、(3) ロシア語のソビエト簿記会計用語の英訳、(4) ソビエトの「簿記計算」誌の各号の全論文タイトルの英訳である。

こうした編集方針はソビエト会計の内容を伝達するという当雑誌発行の主要目的にそったものであるが、その具体的な内容はソビエトの「簿記計算」誌を主たる資料として利用している⁽³⁾。よって、SAB はいわばソビエトの「簿記計算」誌の英語版ともいえる雑誌である。SAB のさきの (1) の内容については、ソビエト会計を研究している専門家にとっては、きわめて興味ある論稿である。なぜならば、その内容は、ソビエトにおける会計実態のたんなる紹介ではなく、イギリスにおけるソビエト会計にたいする評論がしめされているからである⁽⁴⁾。(2) から (4) にいたる内容は、ロシア語のソビエト会計文献雑誌を直接解読できる者にとっては、とくに注目に値いしない。しかし、(2) の内容については、ソビエトの「簿記計算」誌上の多くの論文のなかから、いかなる主題の論文を選定して紹介しているかをみることによって、イギリスにおけるソビエト会計への関心事を知ることができるという意味では、興味がある⁽⁵⁾。また、(3) と (4) の内容については、ソビエト会計をこれから研究しようとする初心者にとっては便利であるばかりでなく、ロシア語の簿記会計用語の英訳は、とか

く独特の意義をもっているソビエトの簿記会計用語の概念をより深く理解するためには役立つであろう⁽⁶⁾。

以上のような内容をもつ SAB は、おそらく、現在までのところ資本主義のもとで出版されているソビエト会計専門誌の唯一の定期刊行物であろう。なお、ソビエトにおいてもこの SAB の発行は知られており、一定の評価があたえられている⁽⁷⁾。

(1) Why Soviet Accounting? SOVIET ACCOUNTING BULLETIN, Vol. I, No.1, Spring 1973, pp.1-2.

(2) В.И. Ленин, Полное собрание сочинений, издание пятое. Том 35, стр.63. 邦訳「レーニン全集」26巻, 302頁。

(3) 周知のように、「簿記計算」誌はソ連邦財務省の機関が発行しているソビエトにおける会計の理論と実務についての月刊誌である。当誌は 1937 年に発行され、第 2 次大戦中には編集の中断を一時余儀なくされたが、1946 年からは再発行されて現在にいたっている。発行部数は、初期には 1 万部であったが、再発行後の 1953 年には 3 万部、1956 年には 5 万部、1960 年代初頭には 7 万部、1966 年には 8 万 1,000 部、1973 年には 13 万部であった。そして、発行から 40 年後の 1977 年には 15 倍の 15 万 3,000 部の発行部数をもつまでに成長している月刊誌である (H.P. Вейцман, От 10000 до 153000 экземпляров журнала ежемесячно. БУХГАЛТЕРСКИЙ УЧЕТ, No.12, 1977г, стр.51-52.)。

(4) SAB は 1979 年 3 月現在までに 1973 年の春季号 (Vol.I, No.1) から 1977 年の夏季号 (Vol. V, No.2) まで発行されている。評論の内容は別の機会に検討するとして、いま、これまでに発行された SAB のなかから、評論のタイトルのごく一部を掲出すれば次のようである。

What is Soviet Accounting? (Vol. I, No.1), The Tekhpromfinplan—an Introduction (Vol. I, No.2), Russian Books on Accounting Prior to 1917 (Vol.I, No.4), S.A.B.—One Year Old (Vol. II, No.1), Accounting in a Changing Society (Vol. II, No.3), Accountants in Eclipse? (Vol. III, No.1), April in Moscow—a Fresh Breeze? (Vol. III, No.2), Structure of Enterprise Management (Vol.V, No.1), Soviet Book-keeper (Vol. V, No.2)。

(5) これまでに発行された SAB には、ソビエトの「簿記計算」誌で発表された多数の論文のうちから、たとえば、次のような主題についての論文が選定されて紹介されている。

レーニンと会計、財務計画、予算会計、勘定計画、企業内ホズラスチョートと経営計算、操業度と費用の関係およびそれらの指標、間接費分析、原価計画と原価の引下げ、ノルマ会計、原価と利潤の分析、収益性分析、経営分析、経済刺激基金の形成と分析、会計主任、会計組織、コンピュータと会計の機械化、監査、会計史、会計教育、農業会計、等々。

(6) たとえば、ソビエトの簿記会計用語のロシア語による略語にたいして、次のような英訳がなされている。

ASUP—Automated system of enterprise management, EVM—Electronic computer,

KVM—Keyboard accounting machine, PVM—Punched card accounting machine, VTs—Computing centre, ORU—Association of accounting workers, MSS—Machine accounting station, MSB—Machine accounting bureau, VUZ—Higher educational establishment, KRU—Control-audit administration (Vol. III, No.4, Vol. IV, No.4 参照)。

- (7) ソビエトの「簿記計算」誌では SAB について次のようにいっている。「資本主義諸国においてもソビエトの国の雑誌は広く読まれている。たとえば、イギリスではバーミンガム大学が雑誌の内容を英語に翻訳している特別の通報を発行している」(Я.В. Соколов, Бухгалтерская периодическая печать за годы Советской власти. БУХГАЛТЕРСКИЙ УЧЕТ, No. 12, 1977г., стр. 56.)。

(3)

さて、SAB の編集責任者であり、現在までのところイギリスでただ一人のソビエト会計研究者である D.T.Bailey 氏の研究内容についてみてみよう。氏はバーミンガム大学の講義では資本主義の管理会計を担当しているが、研究面ではもっぱらソビエト会計学を究明している。また、氏はしばしばソビエトを訪れ、多数のソビエトの会計学者たちと深交をもっている⁽¹⁾。そして、1973 年以降ソビエト会計についての次のようなモノグラフおよび論文を発表している。

I Monographs:

- 1 Some Reflections on Soviet Accounting (Discussion Paper, Series B, Number 29, University of Birmingham, March 1973). 35pp+9pp.
- 2 Some Comparisons with Soviet Accounting (Discussion Paper, Series B, Number 30, University of Birmingham, April 1973). 42pp+5pp.

II Articles:

- 1 Counting Roubles Back in the USSR. ACCOUNTANCY AGE, 27 April 1973, p.13.
- 2 The Changing Role of Soviet Accountants. ACCOUNTANTS WEEKLY, 13 July 1973, pp.24-25.
- 3 Enterprise Accounting in the USSR. ACCOUNTING AND BUSINESS RESEARCH, Winter 1973, pp.43-59.
- 4 Accounting in the Soviet Union. CERTIFIED ACCOUNTANT,

March 1974, pp.99-106.

5 Accounting for the Depreciation of Plant and Machinery in the Soviet Enterprise. ACCOUNTANTS MAGAZINE, April 1974, pp. 111-116.

6 Product Cost Structure in the USSR. MANAGEMENT ACCOUNTING (UK), April 1974.

7 The Business of Accounting: East and West. JOURNAL OF MANAGEMENT STUDIES, February 1975, pp.28-44.

8 The National Chart of Accounts in the USSR. AUSTRALIAN ACCOUNTANT, June 1975, pp.286-290.

9 The Soviet Scene. ACCOUNTANT, 5 August 1976, pp.154-156.

10 The Accounting Profession in the USSR—Attempts at Organisation. ACCOUNTANCY, March 1977, pp.70-73.

D.T.Bailey氏はソビエト会計だけでなく、ポーランドや中国における会計も研究しており、次の論文を発表している。

1 Accounting Techniques in Modern China. ACCOUNTANTS WEEKLY, 5 April 1974, pp.20-21.

2 Why the Polish Accounting System is so unique in Europe. ACCOUNTANTS WEEKLY, 1 July 1977, pp.20-21.

さらに、D.T. Bailey氏は学界やゼミナールにおいてソビエト会計についての次のような報告をおこなっている。

1 Accounting and Accounting Workers in the Soviet Union. 30 January 1974, University of Sheffield.

2 Soviet Accounting : an Appraisal. 9 May 1974, Kingston Polytechnic.

3 Use of Profit in a Planned Economy. 14 January 1975, Institute of Cost and Management Accountants, Berks and South Bucks Branch.

4 Accounting in Russia. Accounting in the Soviet Union. Staff/Student Seminar. 2 December 1976, Middlesex Polytechnic.

- 5 Soviet Industrial Accounting. 9 March 1977, Institute of Cost and Management Accountant, York and District Branch.
- 6 Soviet Accounting—the Final Accounts. 26 January 1978, Middlesex Polytechnic.
- 7 Soviet Accounting : a thumbnail Sketch. 1 February 1979, Middlesex Polytechnic.

こうして、D. T. Bailey 氏は上記のソビエト会計についての論文を1973年から精力的に発表し、今日、イギリスにおけるソビエト会計研究者の権威の第一人者となっている。

氏の個々の論文内容の詳細な検討は、別稿で果したいと考えているが、いま、これらの論文全体を一見するならば、氏は次のような研究方法を採用している。まず、ソビエト会計の実態を紹介・分析し、ついで、その分析結果と資本主義会計とを比較・検討し、そして、この検討成果をとおしてソビエト会計を評価する、という研究方法である。つまり、(1) ソビエト会計実態の分析、(2) ソビエト会計と資本主義会計との比較、(3) ソビエト会計の評価、という三つの軸を基礎にしてソビエト会計研究をすすめている。こうした研究方法は、多数の氏の論文のうちひとときわ力作であると思われるモノグラフに明瞭にみられる。D. T. Bailey 氏は、まず、ソビエトにおける論者の社会主義会計の目的についての見解を分析し、ついで、その見解をソビエト以外の他の社会主義諸国および資本主義諸国における会計実務と比較することによって、ソビエト企業会計の長所と短所、その発展と限界、およびその本質を解明でき、現段階におけるソビエト会計にたいして一定の評価をなしえると強調している⁽²⁾。

もっとも、さきに指摘したように、T.E. Gambling 教授の学究姿勢の影響をうけて、パーミンガム大学では、資本主義諸国間、資本主義国と社会主義国間、および社会主義諸国間における会計の比較研究をとおして会計の本質を探究することが重視されている。このため、この比較研究の分野のなかで、D.T. Bailey 氏は主として社会主義諸国における会計の研究を分担し、くわえて、社会主義会計と資本主義会計との比較研究をすすめているといえる。しかも、バ

ーミンガム大学におけるこうした比較研究の成果は、最近、社会主義国でも注目されてきており、1979年1月にはポーランドの会計学者 A. Jaruga 教授 (Head of the Department of Accounting, University of Lodz) が、客員教授として当大学を訪れている⁽³⁾。

イギリスでのソビエト会計研究は以上のような事情であるが、なお、イギリスと日本以外の先進資本主義諸国においても、近年、いまだ少人数ではあるがソビエト会計研究者が徐々にあらわれてきており、一定の研究成果をあげていることは注目しておかねばならないであろう⁽⁴⁾。

(1) 最近では、D.T. Bailey 氏は、1976年の4月から5月に、また、1978年の4月から6月にかけてソビエトを訪れている。

(2) D.T. Bailey, Some Comparisons with Soviet Accounting. April 1973, p.1.

(3) Alicja A. Jaruga 教授には次のような論文がある。

1 Problems of Uniform Accounting Principles in Poland. THE INTERNATIONAL JOURNAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Vol. 8, No.1, Fall 1972, pp.25-41.

2 Recent Developments in Polish Accounting: An International Transaction Emphasis. THE INTERNATIONAL JOURNAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Vol. 10, No.1, Fall 1974, pp.1-17.

3 Recent Developments of the Auditing Profession in Poland. THE INTERNATIONAL JOURNAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Vol. 12, No.1, Fall 1976, pp.101-109.

4 Accounting and Financial Reporting in Poland. Paper was Presented at : workshop on: Comparative European Accounting, organized by : European Institute for Advanced Studies in Management, in Brussels, Belgium, June 8-10, 1977.

また、教授はヨーロッパ会計学会 (European Accounting Association) でも活躍している。

なお、当学会は1979年には3月26日から28日にかけてケルン大学で開催されたが、パーミンガム大学からは N.A. Hassan 氏が、The Entropy Law, the Cognitive Balance Condition and the Utility of Accounting Information なる報告をしている。

(4) D. T. Bailey 氏も日本を含む先進資本主義諸国における社会主義会計の研究には強い関心をもっている。いま、氏から提供された資本主義のもとでのソビエト会計研究論文の資料をしめせば次のようである。

I Books and Monographs: (著者名のアルファベット別)

1 Campbell R.W., Accounting in Soviet Planning and Management. Harvard U.P. 1963, 315pp.

- 2 Forgach M.M., *Accounting in the USSR*. Seidman and Seidman, New York, 1 April 1963. 18pp.+3pp.
- 3 Goldberg L.G., *Crediting According to Turnover: A Method of Financial Control in the Soviet Firm*. International Business Series, No. 5, Graduate School of Business Administration, University of Washington, 19××,××pp.
- 4 Horwitz B., *Accounting Controls and the Soviet Economic Reform of 1966*. American Accounting Association, Illinois, 1970, 74pp.
- 5 Kirchner P., *Comparison of Accounting Principles—American and Russian*. Publisher unknown, 1964, 44pp.
- 6 Loskutov V.J., *Computer Centres and Automatic Accounting and Control Systems in the USSR*. Department of Commerce, Washington D.C., December 1966, 130pp.

I Articles: (公表年度別)

- 1 The Organisation of Accounting in the Soviet Union. S. Tatm, ACCOUNTANT'S MAGAZINE, May 1959, pp.377-386.
- 2 Accounting in the USSR—Techniques of Soviet Accounting. R.B. Purdue, JOURNAL OF ACCOUNTANCY, July 1959, p.47.
- 3 Accounting Problems of the Russian Accountant. E.J. de Maris, JOURNAL OF ACCOUNTANCY, July 1959, p.52.
- 4 Soviet Accountant. R. Robert, COST ACCOUNTANT, February 1960, pp.44-45.
- 5 Accounting in the USSR. R.J. Cisneros, FORDHAM BALANCE SHEET, May 1960, pp.17-19.
- 6 Accounting Mechanisation in the USSR (News notes). P. Kirchner and G. Ginsburgs, JOURNAL OF ACCOUNTANCY, August 1960, p.20, 22, 24 and 25.
- 7 Background for Soviet Financial Accounting at the Firm Level. E. J. de Maris, AUSTRALIAN ACCOUNTANT, June 1961, pp.299-308.
- 8 Accounting in the USSR. R.E. Drictriova, CANDIAN CHARTERED ACCOUNTANT, February 1963, p.124-127.
- 9 Accounting in the USSR. R.E. Drictriova, ACCOUNTANT, 27 April 1963, p.539.
- 10 Depreciation and Cost Stability in Soviet Accounting. B. Horwitz, ACCOUNTING REVIEW, October 1963, pp.819-826.
- 11 Accounting in the Soviet Union. R.W. Hirschman, FINANCIAL EXECUTIVE, December 1964, pp.35-38.
- 12 Budgeting in the Soviet Union. M.E. Mote, FEDERAL ACCOUNTANT, Winter 1965, pp.150-161.
- 13 Soviet Economic Developments and Accounting. R.H. Mills and A.L. Brown, JOURNAL OF ACCOUNTANCY, June 1966, pp.40-46. (This article may be found in G.G. Mueller and C.H. Smith, *Accounting—A Book of Readings*, Holt, Rinehart and Winston, New York, 1970, pp.81-92, and also in K.B. Berg, G.G. Mueller and L.M. Walker,

- Readings in International Accounting, Houghton, Mifflin, Boston, 1969, pp.113-123.)
- 14 Spotlight on Profits in the USSR. R.H. Mills and A.L. Brown, PRICE WATERHOUSE REVIEW, Summer 1966, pp.18-25.
 - 15 Soviet Auditor has one Potential Client only, the State. M.S. Nicolson, JOURNAL OF ACCOUNTANCY, April 1967, pp.26-27.
 - 16 Accounting and the New Soviet Reform. B. Horwitz, MANAGEMENT ACCOUNTING (U.S.A.), July 1967, pp.43-44.
 - 17 Profit Responsibility in Soviet Enterprises. B.N. Horwitz, JOURNAL OF BUSINESS, University of Chicago, January 1968, pp.47-55.
 - 18 Some Distinctive Aspects of Accounting in the USSR. N.G. Chumachenko and N.M. Bedford, THE INTERNATIONAL JOURNAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Fall 1968, pp.29-40.
 - 19 Accounting and Economic Reform in the Soviet Union. G.M. Scott, ABACUS, September 1969, pp.55-63.
 - 20 Accounting Controls and the Soviet Economic Reform. B.N. Horwitz, CALIFORNIA MANAGEMENT REVIEW, Fall 1970, pp.75-83.
 - 21 Accounting in Russia. R.D. Hoerich, WORLD, Peat, Marwick, Mitchell & Co., Fall 1970, pp.32-35.
 - 22 Enterprise Profit and Profitability Measurement. G. Gorelik, THE INTERNATIONAL JOURNAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Spring 1971, pp.1-14.
 - 23 Financial Management in the Soviet Industrial Enterprise. K.J. Maunders, ACCOUNTING AND BUSINESS RESEARCH, Autumn 1972, pp.298-307.
 - 24 Notes on the Development and Problems of Soviet Uniform Accounting. G.Gorelik, THE INTERNATIONAL JOURNAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Fall 1973, pp.135-148.
 - 25 Soviet Accounting, Planning and Control. G. Gorelik, ABACUS, June 1974, pp.13-25.
 - 26 Computer Applications in Soviet Accounting. N. Kupzhasar, THE INTERNATIONAL JOURNAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Fall 1974.
 - 27 Methods of Analysing Profits of Industrial Enterprises in the USSR. S. Satubaldin, THE INTERNATIONAL OF ACCOUNTING EDUCATION AND RESEARCH, Fall 1976.

お わ り に

最後に、イギリスと日本におけるソビエト会計研究事情を簡単に比較しておきたい。

日本でのソビエト会計研究は、たとえば、武田孟教授がすでに1949年に「ソ連邦に於ける商業經理の課題」なる論文を本誌(第34巻復刊第1巻第1号)に発表

していることからわかるように、第2次世界大戦直後に着手された。そして、周知のように現在では、少人数とはいえ若干名のソビエト会計研究者によってソビエト会計の研究がすすめられている。したがって、日本におけるソビエト会計研究はイギリスよりも早い時期に開始され、また、研究者の数もイギリスよりも若干多いといえる。くわえて、研究領域については、ソビエト会計制度の研究はもちろんのこと、ソビエト会計の各分野の研究も、日本ではすてになされつつある。しかも研究方法については、現存のソビエト会計のあり方を自主的な立場から究明し、日本における当面の社会経済の民主的改編課題を念頭におきつつソビエト会計の諸問題を研究しようとしている。したがって、日本におけるソビエト会計の研究領域はイギリスよりも広範囲でかつ深い研究をしており、また、研究方法もイギリスではみられない科学的社会主義の見地をとっているといえる。

だが同時に、イギリスよりも反共反ソ思想が根強い独特の社会政治的状況、資本主義企業では役に立たないソビエト会計研究を回避する会計学界の保守的姿勢、他の外国語と比較してロシア語教育の未発達などが、日本におけるソビエト会計研究の一層の前進を困難なものにしている。しかるに、こうした困難が比較的すくないイギリスにおいて、現実の歴史的事実を無視せずに現存するソビエト企業で採用されている会計を、近年、系統的かつ組織的に究明し、一定の研究業績をあげてきていることにたいして、日本の会計論者は今後注目しておかねばならないであろう。

バーミンガム大学では、部長をはじめ会計部門の全スタッフ、Maureen Leveson 秘書、Janette Biddle 秘書、およびバイコフ図書館のBrine 館員の皆様方から御親切な御世話をうけた。ここに記して感謝の意を表したい。